

2022年5月 マナ通信 BIRD WEEK

今月のマナ通信

- ◎3月の週日の聖書日課 (使徒の働き、詩篇、他)
- ◎土曜日・日曜日の学び イエスに出会った人々、十字架に向かう道からの感想です。

**使**徒の働きは医者であるルカによって書かれました。内容はモーセにより神から授かった律法の契約の時代から、罪の為に十字架の贖いをして下さったイエス様の支配による時代への移り変わりの苦悩を描いたものです。チェンジの難しさを描いています。神様は愛あるお方で罪ある人間を憐れんで下さり神業をなして下さったのです。

人間は昔も今も罪人です。しかし、その罪を自覚するのは律法によらなければ十分理解出来ませんでした。しかし、イエス様は我々の罪のため血を流し、三日後に復活し、それから皆が見守るなか昇天されました。そして、約束通り皆で祈っているさなか、聖霊が降臨したのです。

この聖霊こそ恵みを下さる神の賜物で、我々にとって、平和に生活する為のかけがえのない助け手です。いつも一緒です。福音は救いを得させる神の力です。ここに、クリスチャンと呼ばれ、隣人を愛し、しんがりとなって歩むことが出来る道があるのだと思います。

しかし、シナイ契約である律法時代から、恵みの賜物による聖霊の時代に移ることはとても大変でした。その為、神は自らの力で聖徒を導き、御使いによっても使徒たちを導き、又、自ら抜擢した者を、その仕事に任命し、聖霊によって彼らを勇気づけ、進む方向を指示しました。

次に、迫害です。使徒たちは、いろいろな迫害を受ける中、聖霊に勇気づけられ福音の伝道に全力を尽くしました。ステパノやヤコブはその為殉教しました。ペテロも命をねらわれ牢に入れられていましたが、処刑前夜、神の御使いが現れ、手錠をはずされ、扉のカギは開き、皆が待っている家に帰らせて頂きました。

パウロは3度の伝道旅行で幾多の迫害を受け、船旅では激しい暴風の中で命拾いをしてます。それでも、神様は苦しみの極限状態で、救いの手を差し延べ福音の伝道に力を与えました。

ユダヤに住むクリスチャンに迫害が起こり、使徒たち以外は迫害を逃れてサマリヤや異邦人の住む地に逃れました。その結果、異邦人に福音が伝わってゆきます。これは神を信じる者が多くなればなるほど、そして、ユダヤ教徒や律法に固執し改革に踏み切れない人々からの迫害が激しくなりました。迫害が福音の拡大に大きな力となったのは皮肉な話です。

三番目に福音が広まる要素として、巨大な勢力をもつローマ帝国が挙げられます。兵士たちは福音に目覚め、信じて、陰になり使徒たちの伝道の助けとなった者もいました。又、ローマから地方に延びる道路は整備され福音の拡大に役立ちました。

行く先々で教会が誕生し、神の導きと、使徒たちの命がけの働きと預言者たちの働きによって福音が世界中に広がりました。そして、パウロも苦難の末、念願のローマに到着することが出来ました。

(畑中伸之)

**ア**うして、主のみことばは力強く広まり、勢いを得ていった。」(使徒19:20)

使徒の働き19章には、パウロが第3回伝道旅行でエペソに滞在した時の一コマが記されてあります、

とありました。

「主のことばの力強さ」は二つの面で現されました。エペソに住む人々の中から悔い改める者が生まれたこと(17-19節)のきっかけはパウロを通して行われた奇跡的な「力あるわざ」(11-16節)だったかもしれませんが、ここでみことばが強調しているのは、不思議なしるしというよりも、その後起こった人々の変化、みことばには、人々を内側から変えていく力があるということです。

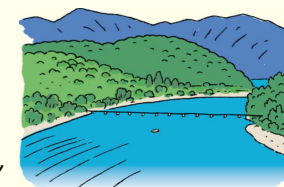
私は、人はまず神様の奇蹟、癒やしにあずかったら頑なな人でも信じ救われるのではないかと思っており、祈って来ました。主のみこころであればそのようなこともありましようが、この度の聖書箇所解説から、また解説者の方が宣教師から贈られたという三つのことば、「みことばを読み、みことばに生き、みことばを語りなさい」に、アーメンでした。

読んだみことばを生きること内側から励まされ、みことばを語れる喜びに預かった方々の証しになぐさめられ、励まされてまいりましたことは感謝です。(福島三弥子)

「苦しみにあったことは、私にとって幸せでした。

それにより私はあなたのおきてを学びました。」(詩篇119:71)

「これらのことをあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあって平安を得るためです。世にあっては苦難があります。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました。」(ヨハネ16:33)

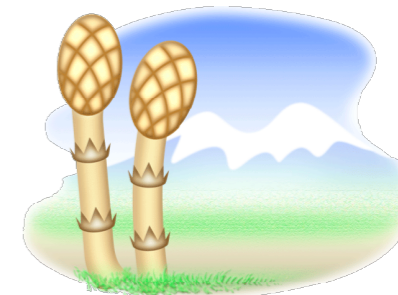


**使**徒の働きを、地図と照らし合わせながら読みました。あの時代によくこれだけの距離を移動したものと、単純に感動を覚えました。13章50節の神を敬う婦人たちや、町のおもだった人たちが扇動されてしまうと言うことに、ため息が出ました。

現代ならマスメディアとも言えるでしょう。声の大きさに囚われず、主からの声か、人からの声か、しっかりと御言葉に照らし合わせて、吟味し判断する習慣を、身につけなければと思わされています。まず主に聞くこと、祈ることを第一に！ 宮清めの事件で宗教指導者たちの悔い改めにつながらなかったことが、83頁の解説にありました。

自分の罪過ちを指摘された時に、素直に悔い改める勇気と、罪を犯した自らを認める真の勇気を持ちたいと思います。

嫌なことを言われても「そうかもしれない」と、まず受け止めることを、習慣にしたいと思いました。また指摘してくれる同信の友がいたら、大切にしなければと思いました。言いにくいことを言い合える友人関係も、主からの贈り物です。(広瀬裕子)



**み**ことばは、あなたがたを成長させ、聖なるものとされたすべての人々とともに、あなたがたに御国を受け継がせることができるのです。」(使徒20:32)

主のなさることは、私たち人間の浅い知恵を用いては理解できません。不完全な私たちが主の一方面的な愛、あわれみによって赦されたものとして扱われます。その不完全な私たちを通して福音が伝えられ

ていきます。

教会は不完全な者たちの集まりですが、そこがイエス様の臨在の場となり、御国を受け継ぐ場となっていくのです。自分の不完全を嘆く必要はありません。人知をはるかに超えた御力に感謝し続けます。

(永井亮子)

**わ**たしは真理への理解も浅く、いい加減な受け止め方をしている、まるで、ぐずぐずに積み上げた石垣のよう。

ロイドジョンズ兄は深い理解をとてども丁寧にわかりやすく説明して下さるので、初めから一つ一つの石をきちっと積み上げ直せるのではないかと期待しています。

律法と預言者によって証しされていた事柄が、今はもうすでに歴史上の事実となっており、それを信じた者は「しかし、今は」と大いに喜んで言える時代です。自分に向かってサタンに向かっても、即座に「しかし、今は」と使いこなしたいものです。(高橋美枝)

**パ**ウロは会堂に入って、三か月の間大胆に語り、神の国について論じて、人々を説得しようと努めた。しかし、ある者たちが心を頑なに聞き入れず、会衆の前でこの道のことを悪く言ったので、パウロは彼らから離れ、弟子たちも退かせて、毎日ティラノの講堂で論じた。これが二年続いたので、アジアに住む人々はみな、ユダヤ人もギリシア人も主のことばを聞いた。神はパウロの手によって、驚くべき力あるわざを行われた。彼が身に着けていた手ぬぐいや前掛けを、持って行って病人たちに当てると、病気が去り、悪霊も出て行くほどであった。」(使徒19:8-12)

使徒の働き19章では、パウロが第3回伝道旅行でエペソに滞在した時の1コマが記されています。パウロは、そこで、成功とは裏腹に、様々な困難を抱えました。その1つに悪い噂を流されて伝道を妨害されました(9節)。それでもパウロは伝道の困難なエペソで、力強い主のことばを伝え続けました。

この地で示された福音宣教が転機となり、「主のことばは力強く広まり、勢いを得ていった」(20節)のです。この時、「主のことばの力強さ」は2つの面で現されました。

1つは、エペソに住む人々の中から悔い改める者が生まれたということ(17-19節)、きっかけはパウロを通して行われた奇跡的な「力あるわざ」(11-16節)が原因と考えられます。みことばには、人々を内側から変えていく力があります。

もう1つは、エペソの信徒たちが、そのみことばを慕い求めるようになったことです。主のことばが勢いづき、力を増していったのも、ここに起因していると思われます。

参考にしたい3つのことばは、①みことばを読み、②みことばに生き、③みことばを語る

パウロは悪いうわさを流され伝道を妨害されても、力強い主のことばを伝え続けました。大変にすばらしいことです。(木村邦夫)



**今**私は、あなたがたを神とその恵みのみことばにゆだねます。みことばは、あなたがたを成長させ、聖なるものとされたすべての人々とともに、あなたがたに御国を受け継がせることができます。」

(使徒20:32)

なかなか成長しない私は、みことばを土台とした生活が定着していないのかもしれない。

「クリスチャンにとって霊的な食物は生ける神のみことばです。」と“みことばを味わおう”にあります。日々のディボーションを大切に、神の御前に静まり、祈る時をより大切にしたいと思います。

(外處トミ)

## 今起こる すべての事に 意味がある 主の御計画 成就するため

2022年 3月 31日



群馬県前橋市の大室公園の桜

**こ**ういうわけですから、私たちが主イエス・キリスト様を信じた時与えられたのと同じ賜物を、創造主があの人たちにもお与えになったのですから、どうして私のような者が、創造主のなさることを妨げることなどできるでしょうか。』ペテロの説明に、これを聞いていた人々は納得し、想像主をあがめてこう言った。『それでは、創造主は命に至る悔い改めを、ユダヤ人以外のすべての人にもお与えになったのですね。』(使徒11:17-18)

神様は国籍や生まれや身分などに関係なく、私たちに救いの御手を差し伸べてくださいます。神様がそうして下さることに感謝して、神様の愛を今日も覚えます。(外處光歩)

**今**私は、あなたがたを神とその恵みのみことばにゆだねます。みことばは、あなたがたを成長させ、聖なるものとされたすべての人々とともに、あなたがたに御国を受け継がせることができます。」

(使徒20:32)

日々、神様のみことばに立ち返ることができるよう。どのような時も、主に信頼し、主にすべてをおゆだねして生きる歩みが続けることができたら幸いです。(外處結実)

**人**の子は、失われた者を捜して救うために来たのです。」(ルカ19:10)

もし、主イエス様が私を捜して下さらなかつたら、私は希望の無い人生を歩み続けて、この世の中を自分の力だけを頼りにして様々な思考を積み上げて模索しながら自分の幸せを目指して歩んでいたことでしょう。

そして、最後には虚しさの中で滅びてしまったでしょう。そして、恐ろしい永遠の地獄の火の中でも生き続けることになっていたでしょう。何と恐ろしいことでしょう。

しかし、神様の憐れみ深いご計画により、計り知れない御恵みによって、神様の家族として別世界に導き入れていただいたことによって、主イエス様を神様の御子と信じることができ、私のための贖いを成し遂げて下さったことを知り、聖霊様によって導いていただき、この世の人の理解できない世界を歩むようにしていただきました。

もはや自分の力と計画の中を歩むことは無く、神様のお導きの中を歩む日々が与えられました。私は贖い主なるイエス様のものとして相応しくなるように、日々予想外のお導きの中で生かされています。

時には私の古い自我には悲しくつらいことのように思えることがあっても、将来の私にとっては最善のことしか与えられません。

この世から目を離すように、主だけを見つめるように救いの恵みの中で生かしていただいています。本当にこの平安を感謝します。(外處徳昭)

**さ**て、サウロはなおも主の弟子たちを脅かして殺害しようと息巻き、大祭司のところに行って、ダマスコの諸会堂宛ての手紙を求めた。それは、この道の者であれば男でも女でも見つけ出し、縛り上げてエルサレムに引いて来るためであった。ところが、サウロが道を進んでダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。彼は地に倒れて、自分に語りかける声を聞いた。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」彼が「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたがしなければならないことが告げられる。」……

さて、ダマスコにアナニアという名の弟子がいた。主が幻の中で「アナニアよ」と言われたので、彼は「主よ、ここにおります」と答えた。すると、主はこう言われた。「立って、『まっすぐ』と呼ばれる通りに行き、ユダの家にいるサウロという名のタルソ人を訪ねなさい。彼はそこで祈っています。彼は幻の中で、アナニアという名の人が入って来て、自分の上に手を置き、再び見えるようにしてくれるのを見たのです。」

しかし、アナニアは答えた。「主よ。私は多くの人たちから、この人がエルサレムで、あなたの聖徒たちにどんなにひどいことをしたかを聞きました。彼はここでも、あなたの名を呼ぶ者たちをみな捕縛する権限を、祭司長たちから与えられています。」

しかし、主はアナニアに言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子らの前に運ぶ、わたしの選びの器です。彼がわたしの名のためにどんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示します。」そこでアナニアは出かけて行って、その家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウロ。あなたが来る途中であなたに現れた主イエスが、私を遣わされました。あなたが再び見えるようになり、聖霊に満たされるためです。」

するとただちに、サウロの目から鱗のような物が落ちて、目が見えるようになった。そこで、彼は立ち上がってバプテスマを受け、食事をして元気になった。サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちとともにいて、ただちに諸会堂で、「この方こそ神の子です」とイエスのことを宣べ伝え始めた。(使徒9:1-20)

第9章は、「使徒の働き」の中で大きな転換点です。これまでは、イスラエルの民に伝道するペテロが、中心人物としての位置を占めていました。ここからは使徒パウロ（ユダヤ名サウロ）が徐々に主要人物となり、それに連れて福音がますます異邦人へと広がってゆきました。

当時、彼は、ユダヤ教界の中で、最も有望な青年のひとりとしてラビたちから認められていました。彼はその熱心さにおいて、他の仲間には抜き出ていました。彼は「この道の者」として知られていたキリスト者の信仰が拡大するのを見て、そこにユダヤ教への異端と感じて、この有害な宗派を滅ぼしにかかったのです。シリアのダマスコでイエスの弟子たちを捜すための令状を大祭司から得ました。それは、彼らを裁判にかけて懲罰するために、縛り上げてエルサレムに引いて来るためでした。

彼とその一行は「ダマスコの近くまで来たとき」、「突然、天からの光が彼の周りを照らした。彼は地に倒れて、自分に語りかける声を聞いた。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」彼が「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」

この時のサウロの気持ちを理解するために、思い出さなければならないことは、ナザレのイエスはすでに死んで、ユダヤ人の墓に葬られた、と彼が確信していたことです。その一派の指導者が滅ぼされた今、なすべきことは、その追従者たちを滅ぼすことだけでした。そうすれば、地上はその災いから解放されるはずだったのです。

今や、サウロは、「イエスは死んだわけではなく、死者の中からよみがえり、天において神の右の座で栄光を受けておられる」ということを知りました。このようにして栄光の救い主を一見したことによって、彼の人生の方向は180度変わったのです。

サウロはその日、イエスの弟子たちを迫害してきたことが、主イエスご自身を迫害してきたことでもあったと知りました。地上にある「からだ」が受けた苦痛を、天におられる「かしら」なるお方も感じておられたのです。

サウロは、イエスご自身についてきちんと教えられました。それからダマスコへ遣わされ、そこで命令を受けることになったのです。

誇り高かったパリサイ人サウロは、「手を引かれてダマスコへ向かっていました。そこで彼は3日間、目が見えなかったのです。その間は、飲み食いもしませんでした。」

その知らせによって、ダマスコのキリスト者たちが受けた影響を、想像できるでしょうか。彼らはサウロが自分たちを捕縛するために来たことを知っていました。彼らは、神が介入して下さるよう、祈っていたでしょう。さらに、サウロの回心のために大胆に祈っていたかもしれません。今、彼らは、信仰に反対する敵の首謀者がキリスト者になったことを聞いたのです。

主はダマスコの信者のひとりであったアナニヤにサウロを訪ねるよう指示されました。アナニヤはこの人物に関するいやな思いを主に告白しました。しかし、サウロが今は迫害するのではなく祈っていることを告げられると、アナニヤは「まっすぐ」という街路にあるユダの家に向かいました。

主はサウロに対してすばらしい計画を持っておられました。「あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器」である。彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりである。サウロは主に異邦人への使徒とされましたが、その使命のゆえに王たちの前に引き出されることになりました。

彼は自分の肉による同胞にも伝道し、そこで最も激しい迫害を経験することになりましたが、彼の後の証しによれば、

「私は生まれて八日目に割礼を受け、イスラエル民族、ベニヤミン部族の出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法についてはパリサイ人、その熱心については教会を迫害したほどであり、律法による義については非難されるところがない者でした。しかし私は、自分にとって得であったこのようすべてのものを、キリストのゆえに損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、私はすべてを損と思っています。私はキリストのゆえにすべてを失いましたが、それらはちりあくただと考えています。それは、私がキリストを得て、キリストにある者と認められるようになるためです。私は律法による自分の義ではなく、キリストを信じることによる義、すなわち、信仰に基づいて神から与えられる義を持つのです。」(ピリピ3:5-9)。

これは私たちも同じではないでしょうか。(福島勲)

貴重なご感想をありがとうございました。

今回はマナ4月号の感想を5月10日までに福島兄弟へお寄せ下さい。(畑中)

